

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 人文科学府

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例1 「21世紀COEプログラムを活用した教育体制、教育内容、教育方法の改善」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

人文科学府では、平成14～18年度にわたって研究資金の交付を受けた21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」を積極的に活用し、大学院教育の内容および方法の改善を進めてきた。平成19年度からは九州大学大学院人文科学府・比較社会文化学府の歴史学関係教員を結集して、両学府にまたがる形で歴史学拠点コースを設置し、また、東アジア諸国の大学・研究機関を中心とするアカデミック・ネットワーク「東アジア史研究コンソーシアム」を構築し、東アジア史に関する国際的な共同研究・調査、国際会議、相互訪問による集中講義や院生ワークショップを積極的に行い、リサーチ・スキル、コミュニケーション・スキル、プレゼンテーション・スキル等々の組織的教育を実践している。また、歴史学・歴史教育セミナーの開催も継続して推進している。



とりわけ平成20年度以降の変化としては、ボストン大学ともコンソーシアムを提携して東アジア史研究の教育研究ネットワークを合衆国にまで拡大し、また「東アジア史研究コンソーシアムを活用した国際的教育研究プログラム」が平成21年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)に採択されたことで、コンソーシアム事業の内容をいっそう拡充することができた。すなわち、新たに本学の歴史学複数分野の教員・大学院生が多数合同して海外の提携校・機関を訪問し、分野横断型の大規模シンポジウム・ワークショップを開催し、海外研究者と共同しての現地資料調査実習を国内外で実施した。またその際には、現今喫緊の国際課題である歴史認識問題について認識を深める相互議論を盛り込んだ。21世紀COEプログラムを実施した5ヶ年間で大学院生による国際学会発表は32件、提携校への留学生派遣は3件であったが、以上の取り組みの結果、平成21年度単年度だけで大学院生の国際学会での発表・ディスカッション参加8件、留学生派遣5名を数えるにいたり、その教育効果は着実に拡大している。東アジア史研究に関する組織的かつ恒常的な国際学術交流とそれに基づく教育は世界的にも類を見ず、海外からも今後の展開に大きな期待が寄せられているところである。

20年11月：国際ワークショップ「前近代東アジア文書の比較史的研究」

20年12月：フランソワ・アルトク氏講演会・ワークショップ「歴史の体制」

20年12月：国際ワークショップ「人間の移動と社会変動」

21年3月：国際学術セミナー「東アジア史及其史料研究：中日高校第四次学術交流会」(於南京大学)

21年3月：国際ワークショップ「魏晋南北朝史の現在」

21年10月：国際ワークショップ「文書のかたち」

21年10月：国際ワークショップ「人骨考古誌学の意義と可能性」

21年11月：国際シンポジウム「前近代東アジアの文化交流」(於全北大学)

21年12月：国際ワークショップ「東アジア青銅器・初期鉄器時代の諸問題」

・「歴史学拠点コース」→ <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/index.html>

・「東アジア史研究コンソーシアム」→ <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/consortium.html>

・同上活動記録→ <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/log/2009/index.html>

・「東アジア史研究コンソーシアムを活用した国際的教育研究プログラム」

→ <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/pp.html>

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 人文科学府

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例2 「教育関連の広報活動の向上」



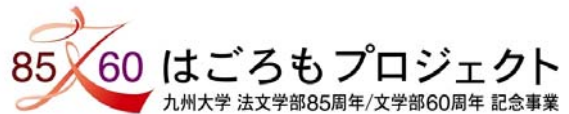
2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

(1) 学部・大学院統合パンフレットの新規作成

平成 19 年度広報委員会において文学部および大学院人文科学府の案内パンフレットの抜本的見直しを行い、従来個別に作成していた両パンフレットを統合し、学部・大学院の有機的な関連を明確に打ち出した平成 20 年度版案内パンフレット『九州大学文学部・九州大学大学院人文科学府案内 2008』を作成した。デザインも一新し、ビジュアル化の推進、英語ページの充実、先輩からのメッセージ等のコラムの充実等々、内容の刷新と一層の充実を図った。これにより学部・大学院の接続がより明確となり、一貫性ある教育理念を受験生ならびに大学院進学希望者に提示することが可能となった。

(2) 九州大学法文学部 85 周年/文学部 60 周年記念事業による一連の広報活動

平成 21 年は上記のような記念の年であり、文学部では現代社会における文学部の存在意義を学内外に示すために種々の記念事業（はごろもプロジェクト）を遂行した。これは文学部および人文科学府の教育・研究全般を全教員が見つめ直す絶好の機会となり、九州大学文学部および人文科学府の姿をより明確に社会に示す契機となった。そのうち、教育関連の広報活動の向上に資する企画には以下のようなものがある。



1) 朝日カルチャーセンターとの提携講座の開設（平成 21 年 4 月 18 日より）。従来の公開講座ならびに社会連携セミナーを企画・宣伝力に優れた民間企業との提携講座とすることで、集客力を飛躍的に高め、九州大学文学部・人文科学府の学問・教育を広く社会に紹介することができた（21 年度上半期「古今東西 あの世界とこの世」、21 年度下半期「人はなぜ生きるのか」）。

2) 文学部同窓会との共催による記念講演会・祝賀会等の開催（平成 21 年 9 月 19 日）。格式張った式典類を敢えて避け、卒業修了生・現役学生・教員集団はもとより、一般市民も自由に参加できる回遊性の高い企画を同時並行で開催。若い卒業生が講師を務めた記念講演や、大学院生を中心とした学生 11 団体による研究発表・資料展示・デモンストレーションは、高校生をはじめとする多くの市民の参加を得て盛況であった。その成果は記念誌『蒼天悠悠』（21 年 3 月刊）に収録し、広く公開した。

3) 財団法人福岡文化芸術振興財団と福岡アジア美術館と連携した学生によるアジア現代美術展の企画・実施（平成 21 年 9 月 5 日～11 月 23 日）。

4) 福岡市美術館との共催による「仙厓展—九州大学文学部所蔵中山森彦コレクション」の開催（平成 21 年 10 月 3 日～11 月 29 日）。ともに芸術学講座の大学院生が企画・実施に携ったもので、教育成果を広く社会に紹介するものとなった。 → <http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/hagoromo/>

(3) ホームページの抜本的改革

広報委員会は平成 19 年度に英語版を作成して国内外への広報を一層充実させた。21 年度には業者委託による抜本的な見直しを行って基本設計から各コンテンツに至るまで詳細な再検討を重ね、全面的なリニューアルを行った。その結果、休校通知が携帯・PHS 等で閲覧可能になるなど、学生にとっての利便性が大いに向上するとともに、人文科学府の教育全般を広く社会に広報することが可能となった。また、学府長賞に関する情報を紹介するなどして、大学院生の勉学意欲の向上も図っているところである。 → <http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/>

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 人文科学府

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例3 「現代文化論」の開講とその継続的見直し

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

現代文化論Dの追加

今日の多様な文化状況に対応するため、平成20年度より従来の3科目に加えて「現代文化論D」を新たに開講した。その評価と検証についてはカリキュラム委員会で検討のうえ、FD委員会が学生に対するアンケートを実施した。その結果、新しく立てられた現代芸術に関する科目は好評であると認められたので、21年度以降も引き続き現代文化にアクティブに関わる学外の講師による授業を用意することとした。21年度開講後も評価・検証を行い、その結果を授業担当教員に文書にて報告して意見を求め、更なる改善につとめた。

科目の増設により多様な現代文化の諸局面をより多くの学生に提示することに成功している。

→ 平成20年度FD委員会報告書『『現代文化論』について』（平成21年2月15日付）

→ <http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/cgi-bin/syllabus/cgi-bin/table-odd.cgi?thisyear=2009&num=2911342&each=1>

| 現代文化論DII | |
|---|---|
| 講義題目: 文化研究の対象としての宝塚歌劇 | |
| 現代文化論科目(2単位) 本務なし(早稲田大学現代政治経済研究所 特別研究員) 川崎 賢子 | |
| 授業の概要 | 1. モダニズム文化としての宝塚歌劇の歴史を学ぶ 2. 女性の身体表現としての宝塚歌劇を分析する 3. 西洋文化受容、文化変容の媒体として宝塚歌劇を考察する 4. 宝塚歌劇団というシステムの過去現在未来を考える |
| 学習目標 | (1) 全般的な教育目標: 日本における近現代のパフォーミングアートの特殊性と普遍性について学ぶ。 (2) 個別の学習目標: モダニズム、ジェンダー、異文化受容などをキーワードに、宝塚を分析する。 |
| 授業の進め方 | 映像資料、文献資料を紹介しつつ講義。 ディスカッション。 |
| 教科書等 | <教科書> 川崎賢子「宝塚というユートピア」岩波新書 <参考図書> 川崎賢子「宝塚——消費者会のスペクタクル」講談社選書メチエ |
| 成績評価方法 | |
| 学習相談 | |
| その他 | 日時: 8月7~11日 博多座観劇について: この集中講義期間内に、博多座において宝塚公演を鑑賞します(日時未定)。講義の理解を深めるためにも、こちらも是非ご参加ください。席種は日席(6,000円)ないしC席(4,000円)を予定しています。チケットはまとめて購入しますが、そのため人数を事前に把握する必要がありますので、6月19日までに必ず受講登録を行ってください。観劇を希望しない方は、その旨を受講登録書にご記入ください。 |

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 人文科学府

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例4 「シラバス内容の向上」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

シラバス委員会（平成19年度よりシラバスWGに改編）では、毎年、シラバスの掲載内容や入力方法等について改善を積み重ねてきた。また文学部では、FD委員会が学生による授業評価及び教育体制の改善に関するアンケートを毎年実施しているが、このアンケートに休講等の情報をホームページに掲載してほしいという要望が多数寄せられたため、FD委員会とシラバスWGで協議の上、平成20年度からホームページで休講等の情報を閲覧できるように改善した。これは、教員が授業の休講や変更についての情報をWeb入力し、ホームページ上に掲載するもので、同時に携帯やPHSでも閲覧可能にするものである。この結果、学生が休講等の情報を得ることのできる機会が拡大し、利便性が大いに向上した。

→ <http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/cgi-bin/syllabus/index.htm>

→ <http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/cgi-bin/syllabus/cgi-bin/class-schedule.cgi>



(教員入力画面)



(学生閲覧画面)